

## 〈資 料〉

# J. S. ミルと労働者教育

——ミルの未発表6通の書簡について\*——

井 上 琢 智

ここで初めて発表される J. S. ミルの 6 通の書簡は、1984 年に関西学院大学図書館が購入した「ジェームズ及びジョン・スチュアート・ミル著作文庫<sup>1)</sup>」に含まれている。これら 6 通の書簡はいずれも現在刊行中の *The Collected Works of John Stuart Mill* の第 14, 15, 16, 17 巻 *The Later Letters 1849–1873*<sup>2)</sup> には収録されていない未発表書簡であり、資料上貴重なものである。その内容は以下の通りである。

第一書簡：Avignon, Oct. 2, 1866, To Mrs. F. Malleson (一葉, 2 ページ)。

第二書簡：Avignon, Oct. 27, 1867, To Mr. W. Rossiter (一葉, 2 ページ)。

第三書簡：Blackheath Park, Kent (London)<sup>3)</sup>, May 19, 1868, To Mr. W. Rossiter (一葉, 3 ページ)。

第四書簡：Blackheath Park, Kent, May 27, 1868, To Mr. W. Rossiter (一葉, 3 ページ)。

---

\* これら関西学院大学図書館所蔵のミル書簡の公表にあたっては、関西学院大学図書館および経済学部久保芳和教授のお世話になった。記して謝意をあらわします。

1) 関西学院大学図書館『ロック、スミス、ミル父子著作文庫目録』, 1985年。このミル父子著作文庫については久保芳和「『ジョン・ロック著作文庫』および『ジェームズ及びジョン・スチュアート・ミル著作文庫』について」(『時計台』No. 28, 関西学院大学図書館報, 1983年3月, および久保芳和「四つの文庫—ロック、スミス、オウエン、ミル父子—」『学鑑』(丸善)83巻2号(1986年2月), 28—31ページを参照のこと。

2) *The Collected Works of John Stuart Mill, The Later Letters of John Stuart Mill, 1849–1873*, ed. by F. E. Mineka and D. N. Lindley, University of Toronto Press, 1972.

3) 〈 〉は筆者による補足である。

第5書簡：Blackheath Park, Kent, July 26, 1869, To Mr. W. Rossiter (一葉, 2ページ).

第6書簡：Blackheath Park, Kent, March 14, 1871, To Mr. W. Rossiter (一葉, 2ページ).

これら6通の未発表書簡はミル研究の上でどのような資料上の価値をもつであろうか。もっとも注目すべきは、第一書簡および第二書簡で言及されている Working Women's College および Working Men's College すなわちミルと労働者教育とのかかわりについてであろう。

周知の通り、労働者を教育しようとする中産階級の偉大な努力は、19世紀中葉になって部分的ではあるが成果をおさめはじめた<sup>1)</sup>。ベイリー (R. S. Bayley) 師は1842年にシェフィールドでピープルズ・カレッジ (People's College) を開校した。このカレッジは、朝6時半、夕方7時半の二回、ろうそくのもとで授業を行ない、週につき9ペンスで男女共学であった。このカレッジの影響を受けたモーリス (J. F. D. Maurice, 1805—72) は、キリスト教社会主義者として、生活共同体・精神共同体としてのカレッジ・ライフを中核とする教育を労働者に開放すべく、合同機械工組合の書記長アレン (C. Allen) とその協力者ニュートン (W. Newton) などの協力を得て、1854年10月30日にワーキング・メンズ・カレッジ (Working Men's College) を開校した<sup>2)</sup>。

この労働者のためのカレッジを開校する運動は、ハリファックス (1855—1880年代初頭)、サルフォード (1858—86年)、ボストン (1859—92年)、イプスウィッチ (1861—90年)、レスター (The Vaughan Working Men's College <1862> 名称変更により Vaughan College, an extramural center for Leicester University) などにひろまった。

労働者教育と同時に、女性に中等教育や高等教育を開放しようとする運動もまたこの時期に展開されていった。この教育の女性への開放という長い歴史の最初の第一歩も、モーリスの指導と創意のもとでガヴァネス互惠協会 (Governesses' Benevolent Institution, 1841年設立) によって踏み出された。これがクイーンズ・カレッジ ((Queen's College, 1848年開校) であった。その成功によってリード夫人 (Elizabeth Reid) はベッ

1) Thomas Kelley, *A History of Adult Education in Great Britain*, 1962, 1970, p. 181.

2) 小堀勉「ロンドン労働者大学と英国成人教育」、『名古屋大学教育学部紀要』, 1965年。

ドフォード・スクウェアにレディース・カレッジ (Ladies' College) を1849年に開校した。これらのカレッジは最初から中産階級の女子に中等教育をほどこそうとの目的をもつカレッジであった。<sup>1)</sup>

その他、1850年にはバス (Frances M. Buss) によって北部ロンドン・コレジエート・スクール (The North London Collegiate School) が、1858年には彼女が引き継ぎ、改革したチェルテナム・レディース・カレッジ (The Cheltenham Ladies' College, 1853年開校) が同じ目的で設立されたのである。

オックスブリッジでの女子高等教育はさらに遅れた。ケンブリッジでは、1869年に18才以上の女性のために高等地方試験が受けられるようになり、ガートン・カレッジ (Girton College, 1869年開校) やニューナム・カレッジ (Newnham College, 1871年開校)<sup>2)</sup> がその中心であった。一方、オックスフォードでは、レディ・マーガレット・ホール (Lady Margaret Hall, 1878年開校) やサマヴィル・カレッジ (Somerville College, 1879年開校)、それにセント・ヒューズ・カレッジ (St. Hught's College, 1886年開校)<sup>3)</sup> が中心であった。

労働者や女性へ中等・高等教育を開放しようというこのような流れの中で、これら書簡に登場するワーキング・メンズ・カレッジやワーキング・ウイミンズ・カレッジは開校されるのである。ウィリアム・ロシター (William Rossiter, d. 1897) は、もとは旅行かばんの製造業者であったが、独学により1854年のワーキング・メンズ・カレッジの開校運動に参加するまでになっていた。ひきつづき、彼は1857年には成人学校 (Adult School) の校長となり、さらにロンドンのトッテナムのブルース・キッスルにあった中産階級のための学校で英語の教師をつとめた。そののち1868年に生物学者ハックスリー (Thomas H. Huxley, 1825—95) を初代校長とし、自から幹事となって、サザークにサウス・ロンドン・ワーキング・メンズ・カレッジ (South London Working Men's College)

- 1) バンクス夫妻著・河村貞枝訳『ヴィクトリア時代の女性たち—フェミニズムと家族計画—』、創文社歴史学叢書、50—60ページ、安東伸介他編『イギリスの生活と文化事典』、研究社、1982、452—504ページ。
- 2) 橋本昭一「A. マーシャルのケンブリッジへの帰還—1861—1885年のマーシャル—」『経済論集』関西大学、33巻3号、および橋本昭一「女性と高等教育—19世紀のイギリス—」『現代社会と知識』1985年4月。これら諸論文では、マーシャルの妻メアリー・ペーリーと初期のニューナム・カレッジとの関係が紹介されている。
- 3) 『イギリスの生活と文化事典』、452—504ページ。

の開校に参加していたのである。また彼は借地改革協会 (Land Tenure Reform Association) のもっとも望ましく、貴重なメンバーの一人でもあった<sup>1)</sup>。

一方、ワーキング・ウイミンズ・カレッジは、1864年にロンドンのブルームズベリーのクイーンズ・スクエアに、マレソン夫人らを中心に開校されたのである<sup>2)</sup>。このマレソン夫人とはエリザベス・ホワイトヘッド (Elizabeth Whitehead) であり、マレソン (Frank Rodbard Malleson) との結婚によって F. マレソン夫人 (1828—1916) となった人物であった<sup>3)</sup>。開校当時、関係者は、男女共学に賛同し、すでに開校されていたモーリスのワーキング・メンズ・カレッジとの合併を歓迎したが、それが拒否されると、1874年に学校名を The College for Men and Women と変更したのである<sup>4)</sup>。

教育・労働者・女性問題に大きな関心をいただいていたミルが、これら諸問題の接点ともいべきワーキング・メンズ・カレッジやワーキング・ウイミンズ・カレッジの運動に無関心でいられるはずがないのである。

第一書簡は、ワーキング・ウイミンズ・カレッジの成功を願いつつ、19日に予定されている会合にはアビニオンに滞在中のため出席できず、ましてや就任演説といった重要な件を引き受けられないことを告げる書簡である。現行のトロント版『ミル著作集』に含まれる書簡の中で、この点に直接言及した書簡がみあたらない以上、ミルがこのワーキング・ウイミンズ・カレッジに直接関係をもっていたことを示唆するこの書簡はきわ

- 1) *The Collected Works*, vol. XVII, p. 1645.
- 2) この点に関しては、高山短期大学佐藤共子氏による多くの有益な御指摘・情報によるところが多い。記して謝意を表わします。
- 3) この Elizabeth Malleson には以下の伝記があるが、筆者は未見である。 *Elizabeth Malleson, 1828-1916 Autobiographical notes and letters, With a memoir by Hope Malleson*. pp. vii + 239, 1926. この他、彼女の著作としては *Notes on the Early Training of Children*, pp. 128, 1884, 1885 がある。
- 4) この変更に対した少数派の人びとはもとの名称に固執し、新たにフィッロイ (Fitzroy) ストリートに The College for Working Women を設立した。この学校はその後も存続し、その中心人物は Frances Martin であったので、彼女の死後校名を Frances Martin College と変更した。なお、The College for Men and Women は1901年に廃校になった (T. Kelley, op. cit., p. 187).

めて資料上の価値は高いといえる。<sup>1)</sup>

第二書簡は、ロシターのサウス・ロンドン・ワーキング・メンズ・カレッジ開校の計画に対して、その内容を十分熟知しないまま自らそれに参加したくないとの意志表示をした書簡である。

第三書簡は次の2点に言及している。まず、ミルの文通相手の一人で、当時ジャーナリストとして活躍していたプルーマー (John Plummer, 1831—ca. 1914)<sup>2)</sup> が、おそらく1868年1月以前から行なっていた労働者向けの講義 (ミルはこの講義を労働者にとって有益なものと考えていた)<sup>3)</sup> に出席したいと思うが、前年に通過した第二次選挙法のうち、スコットランドの議員再分配に関する法案の審議があるので出席できないと述べている。彼はこの時期1865年7月の総選挙でウエストミンスター選挙区の自由党出身の下院議員として当選し、多忙な議会活動を行なっていたのである。<sup>4)</sup> 次に第二書簡でロシターによって計画が示され、この時点ですでに開校されていたワーキング・メンズ・カレッジの成功を喜んでいることを告げている。

第四書簡は次の3点について言及している。まず、第三書簡で述べたプルーマーの講義に出席できなかったが、その講義の成功に喜びの意をあらわしてのち、ロシターが書いたおそらく養児院に関するノートを、この問題を取り扱っている都市養児院委員会 (Metropolitan Asylums Board) の議長であるブルーアー (W. Brewer) 博士<sup>5)</sup> に送付し

- 1) ミルはケンブリッジ大学における女性教育の重要性を認識していたがゆえに、彼の財産および義娘ヘレン・テラーの財産から年間40ポイントを4年間にわたって支払う奨学金を提供し、ケンブリッジへ外部からやってくる女性のための生活資金とした (橋本前掲論文「A. マーシャルのケンブリッジへの帰還」, 294ページ)。
- 2) 彼は1859年4月28日からミルとの文通を開始した。彼は *The Working Man, Family Paper, The London Figaro* の編集 (*The Collected Works*, vol. XVII, p. 1754) にたずさわり、*Reduction of the Hours of Labour ... a reply to the Prize Essay of the United Building Trades* (1859), *Strikes: their causes and their ...* (1859), *An Address to the Building operatives and Working Men of the West Riding* (1860) などを著した (*The Collected Works*, vol. XV, p. 609, n. 1. 2)。なお、この *An Address* は堀先生が購入し東北大学へ送られた図書に含まれている (久保芳和, 「蒐書家・堀経夫」, 『研究年報経済学』, (東北大), vol. 47, No. 4, 1986, 1)。
- 3) *The Collected Works*, vol. XVI, p. 1358.
- 4) ミルの議会活動については、山下重一「J. S. ミルの政治思想」, 木鐸社, 昭和51年, 第7章を参照のこと。
- 5) *The Collected Works*, vol. XVI, p. 1114, p. 1488.

## J. S. ミルと労働者教育

たことを告げている。最後にミルの著作 *England and Ireland* (1868年2月出版) を書簡郵便で送ったことを伝えている。文面からみるとこのロシターのカレッジにミルはロングマン社を通じて書籍を寄附したと思われる。

第五書簡は、貧民の子供のための公園を開園する計画に対して支持を表明する書簡である。当時、いわゆるハイド・パーク事件を契機として政府には公園での集会を禁止する動きがあったが、ミルはそれに反対し、逆に国民日曜連盟 (National Sunday League) による労働者教育・レクリエーションのために公園を含む諸公共施設の公開をめざす運動に呼応した形で、この計画を支持したと思われる。

第六書簡は、ロシターの著書 (内容不明) に対する御礼と、時間がないため会えないことを詫げる書簡である。

以上今回公表した6通の書簡は、女性や子供を含む労働者階級の人びとの教育普及運動に深い理解を示しながら、その多忙な著述・議員活動のあいまをぬって、それら諸運動に協力・参加しようと努力する誠実な実践家ミルの姿を、これまでの諸資料以上に鮮明にしてくれる。

## 参考資料<sup>1)</sup>

Avignon  
Oct. 2 1866

Dear Madam

I wish every possible success to the Working Women's College, but, independently of my absence from England<sup>2)</sup>, it would be quite incompatible with other very pressing occupations for me to attend and take part in the proceedings at the meeting on the 19th; much more to prepare so important a thing as an inaugural address. Regretting my inabil-

- 1) これらのミルの自筆書簡の解読に際しては大阪女学院短期大学 W. M. エルダー教授、大阪商業大学角川周治郎助教授の御協力を得た。また、これら書簡はすでに日本ミルの会第19回例会 (昭和60年3月29日) で報告された。その際、同会会員とりわけ横浜国立大学高島光郎教授から多くの有益な御指導を得た。記して謝意を表わします。
- 2) ミルのアビニョン滞在については山下前掲書269~70ページおよび282ページを参照のこと。

J. S. ミルと労働者教育

ity to give a more satisfactory answer, I am

Mrs F. Malleson<sup>2)</sup>

Dear Madam  
Very truly yours  
J. S. Mill

Avignon  
Oct. 27, 1867

Dear Sir

I should be glad to see a good Working Men's College established either on South London or anywhere else, but I should not like to connect my name with any particular project of the kind unless I knew and had well considered its plan of teaching and scheme of management and unless my own occupations permitted me to take part in, or at least to keep myself well informed as to the mode in which it was carried on.

I am

W<sup>m</sup> Rossiter Esq.

Dear Sir  
Yours very faithfully  
J. S. Mill

Blackheath Park  
Kent  
May 19, 1868

Dear Sir

I should like to be present at Mr Plummer's lecture, but on Monday evening between 8 and 9 the House will probably be in the middle of the proceedings in Committee on the Scotch Reform Bill<sup>1)</sup> with divisions constantly impending, and it is therefore unlikely that I

1) 1867年2月25日にディズレーリーは政府のいわゆる第二次選挙法改革法案の原案を説明し、5月末に法案の形で下院に提出した。レイング (S. Laing, 1812—97) は修正案を提出し、ディズレーリーはそれを受け、6月13日に議員を再分配する案を提出した。多くの曲折を経てのち法案は成立した。ただし、スコットランドについては、翌1868年にその再分配法が提出され、最終的にスコットランドでは2つの県選挙区が合併され、1議席を浮かせ、計8議席のうち1つはグラスゴーへ第三の議席として、3つは大学へ、3つは県へ与えられ、1選挙区が新設され、1つの選挙区は第二の議席を得た (中村英勝『イギリス議会政治史論集』, 昭和51年, 291—92ページ)。

J. S. ミルと労働者教育

can attend, and certain that I cannot take the chair. I am most happy to hear of the success of the Institution and particularly of the School.<sup>1)</sup> I am Dear Sir

Mr Rossiter Esq

Very truly yours  
J. S. Mill

Blackheath Park  
Kent  
May 27 1868

Dear Sir

I am happy to hear that Mr Plummer's lecture, which I regret not to have been able to attend, went off so successfully.

I am much gratified by your wish to be on the Election Committee. I have sent your note<sup>2)</sup> to Dr Brewer<sup>3)</sup> who is taking an active part in organising the Committee. You are aware that I do not myself take any part in the arrangements.

I send by Book Post<sup>4)</sup> a copy of my pamphlet on Ireland which I perceive that Messrs Longman<sup>5)</sup> have omitted from the books which I desired them to send for the College.<sup>6)</sup>

W. Rossiter Esq

Yrs very truly  
J. S. Mill

- 1) ロシターが1868年に開放したワーキング・マンズ・カレッジのことと思われる。
- 2) ロシターは借地改革協会に関するノートをミルに送り、それをミルは同協会の有力者 A. リード (Andrew Reid) に送付している。おそらく同種のノートをミルに送ったと思われる (*The Collected Works*, vol. XVII, p. 1645)。
- 3) William Brewer (d. 1881) は、著名な医者であり、医学書の著者でもある。1868年から74年までの間、コルチェスター選出の下院議員となり、都市養児院委員会の議長であった。書簡中の委員会とはこの委員会と関連あると思われる (*The Collected Works*, vol. XVI, p. 1114, p. 1488)。
- 4) 書籍郵便は1848年に創設されたが、当時重さ1ポンドまで6ペンス、書籍郵便1個に限り、かつ主として新本のみを取り扱ったが、ほどなく本の所有者の名前を書くことや、2冊以上の本も同時に送れるようになった。1855年には4オンスまで1ペニー、1ポンドまで4ペンスに値下げされた (星名定雄『郵便の文化史』みすず書房、173ページ)。
- 5) 出版社ロングマン社は1865年以降、ミルの *Political Economy, On Liberty, Representative Government* の廉価版を出版していた (M. S. J. Packe, *The Life of John Stuart Mill*, 1954, p. 448)。
- 6) ロシターの開校したワーキング・マンズ・カレッジのことと思われる。

J. S. ミルと労働者教育

Blackheath Park  
Kent  
July 26, 1869

Dear Sir

I am quite willing that my approbation of parks for the children of the poor<sup>1)</sup> should be made known anywhere, but I would rather not be announced as receiving subscriptions, if for no other reason than that I am often absent from England. I am

W<sup>m</sup> Rossiter Esq

Dear Sir.  
very truly yours  
J. S. Mill

Blackheath Park  
Kent

March 14, 1871

Dear Sir

I am much obliged by your kind offer of a copy of your book, and have read with pleasure the pages you have sent. I should be happy to see you, but I have so many demands on my time that I do not find it possible at present to fix a time for our meeting. I am

W. Rossiter Esq

Dear Sir  
Yours very sincerely  
J. S. Mill

---

1) 1885年に結成された National Sunday League は労働者の教育・レクリエーション・罪のない娯楽のためにすべての都市の公共博物館、美術館、庭園等を日曜日の午後に公開する運動をロンドンを中心に展開していた（川島昭夫「19世紀イギリスの都市と『合理的娯楽』」、『都市の社会史』中村賢二郎編、ミネルヴァ書房、295ページ）。ミルは1864年にこの連盟の副会長の一人に選ばれた（*The Collected Works*, vol. XV, p. 512）。